

「難民として生きる」

キファー・アフイフイさん

キファーは、故郷の地パレスチナに戻るために闘い、国境で捕われ、獄中で6年を過ごした。解放後、パレスチナの子どもたちの支援団体で働いた。複雑で理解困難に見える中東問題が、彼女を通して解きほぐされる。

6月8日(日) 明治大学リバティタワー 7階1073教室
JRお茶の水駅徒歩3分
13:30開場 14:00開演 終演16:30 ●入場無料(ただし資料代1000円)



プログラム

- 1 映画NAKBAアーカイブス版より
キファーの章 (25分)
- 2 難民の支援活動と報道
広河隆一(25分)
- 3 キファー・アフイフイの語る
「難民として生きること」(1時間半)
通訳 山本薫(東京外国語大学非常勤講師)
- 4 コメンテーター 黒木英充
(東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所・教授)
- 5 ゲスト 伊藤和子
(弁護士、ヒューマンライツ・ナウ事務局長)

司会 長沢栄治(東京大学東洋文化研究所・教授)

要申込み

主催●キファーさんとともに難民問題を考える会
共催●DAYS JAPAN(月刊誌) 広河隆一事務所 社会思想史研究会 NIHU「イスラーム地域研究東京大学拠点」
科研費基盤研究(A)「アラブ革命と中東政治の構造変容に関する基礎的研究」
後援●NPO法人パレスチナの子どもの里親運動 協力●NPO法人ヒューマンライツ・ナウ



キファー・アフイフイ

パレスチナ難民としてレバノンのシャティーラ・キャンプに育ったキファーは、1982年の虐殺事件を生き延びたが、家族の多くをイスラエル侵攻やレバノン内戦で失った。

18歳の時、抵抗運動に参加したキファーは、イスラエル国境で逮捕された。その後行方不明になったキファーを探し出してほしいと、彼女の母親に頼まれた広河は、友人であるユダヤ人弁護士に捜索を依頼する。彼女が出獄したのは、逮捕されてから6年後である。その後彼女は、親を失ったパレスチナの子どもの救援運動「ベイト・アトファル・アッソムード(子どもの家)」の活動に参加した。



広河隆一

(ひろかわりゅういち)

1943年生まれ。報道写真月刊誌DAYS JAPANの編集長、フォトジャーナリスト。

自身のパレスチナ取材映像をまとめたドキュメンタリー映画「NAKBA」を監督。著書多数。
NPO法人「沖縄・球美の里」理事長、チェルノブイリ子ども基金設立代表(1991年)、パレスチナの子どもの里親運動設立代表(1984年)

お問い合わせとお申込み先(お名前とご連絡先をお書きください)

広河隆一事務所

FAX: 03-3322-0353 メール: hiropress@daysjapan.net